



唯一無二の箱づくり。顧客のイメージをかたちにする。



特別感のある紙箱はまるで木箱のようにも見える。



ワンストップで自社製作を行う。小ロットでも対応が可能だ。

紙箱の原価見積の自動計算システム化

多品種小ロット生産による付加価値を支えるDXを促進

紙箱パッケージや紙製品の製作・企画・販売を行うモリタ株式会社。1932年に札幌市中央区で創業して以来、90年を超えるキャリアを積み重ねてきた。現在も地域に根差した町工場であることを誇りに、世界にひとつの紙箱をつくり続けている。

ワンストップで全て自社製作できるため、多品種小ロット生産が可能だ。同社の1番の強みは、全国でも製造可能な企業が約5社しかない「Vカットボックス」という特殊な製法だ。木箱のようにも見える高級感のある仕様で、スイーツやお酒などを扱う多くの企業から

注目されている。

同社では、「箱プランナー」と呼ばれる営業社員が、顧客のリクエストやイメージに応じて見積もりを作成する。先述した製法のほかにも、貼箱、組み立て箱、特殊加工などさまざまな製造方法とその組み合わせがある。そのため見積もり作成は複雑で時間を要し、正確な作成には経験が必要だ。そこで今回導入したのが、紙箱の原価見積の自動計算システムである。

付加価値の高いものづくりを支えるデジタル化

本事業では、札幌のアプリ開発会社・株式会社インブルと協業し、自動計算システムを開発。2025年1月から試験運用を兼ねた本格運用を開始した。現場での活用には慣れが必要な部分もあるが、見積もり時間が半減し、正確さが格段に向上するといった効果が表れている。見積もりデータのクラウド化により、確認や共有が容易になり、人材育成にも貢献している。

代表取締役の近藤さんは「今後は工程の見える化やスケジュール管理のDXも進めたい。営業、製造、経営など、デジタル化で改善できる部分はまだ多い。成果が見えることで、スタッフのモチベーション向上や離職防止にもつなげたい」と語る。同社は2024年、札幌市のSAPPORO NEXT LEADING企業に認定された。紙の魅力を活かした箱文化を後世に残すため、提案力強化と人材育成が喫緊の課題だ。

海外展開にも注力している。2025年1月にはフランス・パリの展示会に出展し、クラフト感と高品質を兼ね備えた製品が高く評価された。今後は販路拡大を目指し、日本語のみのWEBオーダーシステムの英語対応も検討中だ。

代表取締役社長
近藤 篤祐



DX推進で複雑な事務を効率的に

0からのシステム開発は初めてのケースでしたが、自社の状況に合ったシステムが導入できたと思います。今後も自社の付加価値を高めるDXを進めます。

公式ホームページはこちら

<https://www.hakop.jp>



モリタ株式会社

札幌市白石区中央2条3丁目2番17号 TEL 011-831-1151 FAX 011-812-2020
設立:昭和30年2月 従業員数:25名 代表者:近藤 篤祐

お客様も、作り手も、
自慢できるハコをつくる

地域のデザイナーと協働しながら、商品の顔となる紙箱を年間1,000種類以上つくります。